

Sj

人とクルマのいい関係をめざして

5

2005 MAY

編集室：〒351-0188 埼玉県和光市本町8-1
本田技研工業株式会社
安全運転普及本部内
電話 048(452)3304編集人：河野光彦
年間購読料：1200円(定価1部100円・消費税込)
郵便振替 口座番号：00170-7-173273
加入者名：㈱アストクリエイティブ
安全運転普及本部係今月の
スポット同じハンドルを握るとい
う行為も、プライベートと
仕事では安全運転の意
味合いが異なってきます。
これを理解してもらう場
が、新入社員への研修
です。

(特集より)

CONTENTS

- 特集：シリーズ教育現場 / 第1回 ①
いま、企業の新入社員教育の現場を探る
 TRAFFIC ADVICE ②
 埼玉県川島町立出丸小学校・自転車教室 / 中学校へ進学後、安全な
 自転車通学をすすめる教育
 SAFETY REPO ④
 本田技研工業(株) 四輪新機種センター / 所員一人ひとりが交通安全
 への参加意識を高めた無事故強化月間
 TOPICS ④
 レインボースクールと光新社屋落成記念式典 / 生涯安全教
 育の場につながる! 新校舎完成
 NEWS REVIEW ④
 平成16年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈
 式 / 学際的な視点から交通諸問題に取り組む
 活動短信 / 交通安全センター4月
 OPINION ⑤
 松浦常夫 / 高齢運転者が危険を防ぐ運転戦略を知り、運転のやめ時
 も判定できるようなワークブックを作成したい
 HOW TO LEAD ⑤
 ドリームモースクール昭和・高齢者講習 / 実態に即した教育が高齢
 者の事故を防ぐ
 DOCUMENT EYE 183 ⑥
 通勤時におけるキス&ライイ 家族によるクルマでの送迎の状況を観察する

シリーズ
教育現場
第1回

いま、企業の新入社員教育の現場を探る

4月、新入社員を迎えた企業が、運転業務につく新入社員を対象に安全運転教育・研修に取り組む。学校を卒業した社会人1年生は研修から何を学ぶのだろうか。今年度は、こうした教育現場をシリーズとして取り上げていきたい。その第1回として、参加体験型実践教育の現場である交通教育センターでの企業研修の現場の取材を通じて、企業の新入社員への教育はどのように行われているのか、新入社員教育のあり方を探る。



アクティブセーフティトレーニングパークもてぎ 栃木県芳賀郡茂木町 での(株)伊藤園の新入社員研修



鈴鹿サーキット交通教育センター(三重県鈴鹿市)でのセコム(株)の新入社員研修

交通教育センターレインボー埼玉 埼玉県比企郡川島町 での生活協同組合連合会コープネット事業連合の新入社員研修

この4月で入社1年が経った(株)伊藤園・仙台南部支店の相沢義人さんは毎日3トトラックを運転して、担当地域の自動販売機、会社や病院の売店などに飲料を配送する。出社は毎朝7時半頃、トラックを動かす前には、ライトやウインカー、ブレーキランプなどが点灯するかどうか、タイヤの間に何か挟まっているかなど点検を行う。トラックには前日、自動販売機のゴミ箱から回収した空き容器が積まれている。それを「置き場」にトラックを移動させ捨てに行くが、この時に車体の動きで気になるところはないか、ブレーキはきちんと効いているかなどを意識しながらトラックを動かして確認しているという。

昨年春、相沢さんはアクティブセーフティトレーニングパークもてぎでの新入社員安全運転トレーニングを受けた。「学生時代は何気なく運転をしていたので、研修で運行前点検など基礎の基礎を教わった際は、『こんなことまで毎日やる必要があるの?』と思っていました。しかし、3日間の研修が終わる頃には、『このように基礎をきちんと行うことで安全は守られることが理解でき、運転に対する心構えが変わりました。トラックは乗用車と違って車体が大きく、MT(マニュアル・トランスミッション)で高さもあり、ブレーキの効きも違う。そして、トラックは内輪差が大きいことがよく理解できました。これらは現在も運転する時に、『いつも気を付けて』という気持ちです。」

大学を卒業して生活協同組合にいたまこ1Pに入り、2年目を迎えた大島誠さん。大学時代は安全運転に心がけ無事故無違反だったという大島さんは、昨年4月に、組合員への商品の配達を行う共同購入担当15名の新入社員仲間とともに受けた、交通安全センターレインボー埼玉での安全運転四輪研修を鮮明に覚えているという。

「初日の運行前点検の時、それまで(学生時代)の習慣で適当に行っていたら、インストラクターの方から、社会人になって毎日トラックを運転するからにはプロの自覚を持つこと。そうした目で点検するんですよ。厳しく言われたことが心に残っています。学生時代の運転と、会社の看板を背負って走る時の運転とは違っている言葉では分かっていたつもりでしたが、日常の1つ1つの動

社会人とプロフェッショナルの自覚を持たせる研修

作から違つのだと気づかされ、プロ意識を植え付けられました。

大島さんが研修で理解したことは、乗用車と違ってトラックには死角が多いこと、制動距離、内輪差と外輪差が明らかに違うことであった。「実際の道路では住宅街や商店街を走ることが多く、壁や塀にこすったり、道路にせり出している看板や民家の屋根に接触してはいけないので、運転席から

見えない所はクルマを降りて確認してしまふ」と話す。配達中に一度だけ、標識にトラックをこすって小さな傷をつけ、物損の事故報告をした時に、上司から厳しく、再発防止のための注意・指導を受けたことだ。それ以来、配達の時に使うファイルに、その事故報告のコピーを貼り付けて、常に自分を戒めて運転しているという。これもプロとしての自覚がさせていることである。

営業担当の全新人社員に実技研修を行う(株)伊藤園

4月11日から13日まで、アクティブセーフティトレーニングパークもてぎで、(株)伊藤園の新人社員安全運転トレーニングが行われた。参加人数は21名(株)伊藤園・総務部の大久保強部長によると、昨年からは営業担当の全新人社員に実技研修を行うことにしたという。今年の研修はアクティブセーフティトレーニングパークもてぎを含む全国9カ所を実施し、新人社員328名が受講した。3日間のスケジュールは、11日、12日が9時に開始して18時まで実技訓練。夕食後、各部屋で夜間討論会とレポート作成を行う。13日は9時から12時までの実技訓練で終了。いずれもA、B、2つのグループに分かれて進行する。



(株)伊藤園の研修の様。車庫入れや前方に見える電光掲示板すべてが点灯したら急制動を行う運転と反応の課題などに取り組んだ

11日は、A、B両グループとも3人1組で1台のトラックを使い、それぞれのグループに各2名のインストラクターが付く。運行前点検・運転姿勢・乗降車はA、B合同で行う。その後はAグループが、慣熟走行、発進停止・直線バック、縦列駐車、車庫入れ、ブレーキ、運転と反応で実技訓練を終了。Bグループは発進停止・直線バック、慣熟走行、交通KYT(危険予測トレーニング)・路上指導、シミュレーター、スラロームスネークバックで終了する。翌日の12日は、各グループが交代して前日やらなかった訓練を行う。

慣熟走行では、インストラクターの運転する先導車が直線部分で速度を出しても後続の新人社員のクルマは付いてこない。クラッチ操作に慣れていないため、速度が出ないのだ。走り込むうちに運転姿勢が崩れてきたり、左折時の巻き込み確認などができなくなってくる人もいる。MTの乗用車を用いた発進停止は、ミラーで後方確認、ウィンカーを出し、目視で後方確認をしてクラッチをつないで発進する手順を覚える。MT車に乗り馴れていない人がほとんどのため、インストラクターが多かった。

運転と反応では40km/hで走行中、指定されたパイロン位置から、その先にある左右2つ計4つの電光掲示板すべてに絵が点灯した瞬間、ブレーキに足を乗せさせて急制動。パイロンを過ぎた直後に絵が点灯する。どこで絵がすべて点灯したかを全員に確認したところ、全員が指定パイロンより5〜10mほど先の位置で4つが点灯したと答える。インストラクターが「これは反応時間によるものです。この反応時間の間にクルマが進む距離、それが空走距離。人間はモノを認識してから反応するまで約1秒かかります。だから適切な車間距離が必要なのです」と説明した後、全員に普段の車間距離を聞いてみたところ5m程度が多く、40km/hで走行時に安全に停止できる車間距離の15m以上は少なかった。「自分では10m以上の車間距離をとっていると思っても、人間の目で測る距離感にはばらつきがあるので、車間は時間ととるようにしましょう。40km/hなら前のクルマとの車間時間が3秒あれば余裕があるので安全です」とインストラクターがアドバイス。最後はバックでスラローム走行を行うスラロームスネークバックに取り組んだ。

「ミニケース」の仕方を学ぶコープネットの研修

交通教育センターレインボー埼玉

交通教育センターレインボー埼玉では、4月12日から14日の3日間、生活協同組合連合会コープネット事業連合(以下、コープネット)の「安全運転四輪研修」が行われた。参加者は共同購入担当に配属される新人社員49名だ。うち、さいたまコープ15名、今回初参加のコープとつきよう34名である。コープネット・共同購入事業運営企画部・安全運転担当の大窪忠弘さんによると、コープとつきようは昨年まで配属先の事業所で運転トレーナーが中心に3日間同乗して指導していたが、指導を担当する運転トレーナーから、「最初から公道でのトレーニングは危なくて、落ち着いて指導ができない」という声が多かったため、さいたまコープの研修で実績のある交通教育センターレインボー埼玉を利用することになった。

研修のスケジュールは、12日が10時20分から安全運転の基礎知識(講義)、運行前点検・発炎筒体験、運転姿勢・乗降車、死角、シートベルトの重要性、昼食、基本走行(発進・停止・加速・減速・速度調整)、ハンドリング訓練、ブレーキング訓練、まとめて17時30分に終了。13日は9時30分から運行前点検、慣熟走行、ハンドリング訓練、狭路通行、後退訓練、昼食、車庫入れ、縦列駐車、反応制動で17時50分終了。14日は9時30分より、運行前点検、慣熟走行、交差点の通行、狭路通行、昼食、路上診断、危険予測トレーニングで17時に研修が終了。

狭路通行や交差点の通過の訓練を行うコープネットの新人社員。運行前点検の重要性も学んだ



14日9時30分、研修の最終日が始まる。2人に1台のトレーニング用のトラックが割り当てられている。まず、2人で運行前点検と、窓やミラーの清掃を行う。その後各自トラックに乗って訓練用コースへ移動。午前中の課題は交差点と狭路の通行である。狭い住宅街を想定したコースを2人が交代しながら何周も走り続ける。コースにはクランクやS字、信号のない交差点が設定されている。まだトラックに慣れていない新人社員は、クランクやS字で何度も切り返しをして、苦労しながら進む。交差点ではお互いに進んでしまったり、逆にお互いに譲り合っしまい、スムーズに通行できない。

ここでインストラクターが全員を集めて、「交差点では相手のクルマが接近してきたら、相手の動きを予測してください。もし自分の方に右左折してくるのであれば、交差点に近づかないで手前で止まって待つてあげましょう。相手に道を譲る時は、目線を合わせるだけでは通じないこともあります。お先にどうぞ」という意思を手振りですすと相手にも伝わります」と、「ミニケース」の仕方をアドバイスする。続けて、「右左折の3原則を言ってみてください」と問いかけた。「ウィンカーを出す」「安

シリーズ・教育現場 / 第1回 いま、企業の新入社員教育の現場を探る

全確認をする」と新入社員が答えるが、3つ目はなかなか出てこない。「徐行です。みなさんの右左折を見ると、速度を10km/h以下に落としていない方が目立ちました」と指摘する。

さらにインストラクターは続ける。「ウインカーを出さずタイミングも遅い。特にブレーキをかけてからウインカーを出す方も多いですね。また、右左折時はトラックを道路の右または左に寄せるように。道路の中央で止まっているのは後続車の妨げになるので注意してください」。この後の走行ではインストラクターのアドバイスで、交差点での通行も法規に従ったスムーズなものになっていく。昼食をはさみ、午後から49名が順番に公道を走行して路上診断が行われた。3日間で身につけたことが公道でもできるか、インストラクターが同乗してチェックする。路上診断が終わった人は訓

セキユリティ・ドライビングで相手を守るために セコム三重(株)

鈴鹿サーキット交通教育センター

4月11日と12日、セコム三重(株)の新入社員研修が鈴鹿サーキット交通教育センターで開かれた。参加したのは警備担当の社員9名(11日)と6名(12日)。警備をはじめ、セキユリティ事業を展開するセコムグループでは運転においても「自分のみならず相手を守る運転、セキユリティ・ドライビング(SD)」をテーマとしている。11日の研修を始めるにあたって、同社の山本三郎社長は昨年からの取り組み始めた新入社員研修について、「1つはセコムの社員としてふさわしい安全運転意識を醸成してもらうために危険を安全に体験してもらうこと、2つめはセキユリティ・ドライビングを行い、相手を守る運転ができる社員になることを主眼に実施しています」と、そのねらいを語る。

10時から「セキユリティ・ドライビング(SD)」の講義。インストラクターがSD(相手も守る運転、状況や相手の行動に期待しないで、自ら安全を作り出す運転)の考え方を説明する。次に「コースに出て、運行前点検と運転姿勢。死角では、ポールを立てて、クルマの中の新入社員に視認させる。見える所と見えない所をしっかりと覚

練用コースでクランクやS字の狭路通行車庫入れ、縦列駐車訓練を繰り返したインストラクターが一人ひとりに声をかけ狭い道で切り返しを行うタイミングやハンドルをきる角度を細かくアドバイスしていく。16時30分、実技終了。教室に戻って危険予測トレーニング(KYT)を行う。交通場面のイラストを見ながら、どんな危険が予測されるかを考えていく。参加したさいたまコープの関根洋司さんはKYTを受けて、今まで自分本位の運転しかしていなかったことに気づいたという。「道路には危険がたくさん潜んでいると思うと、仕事で運転するのが怖くなります。これからは子どもや高齢者などクルマの特性をよく知らない人に、特に注意しなければいけないと感じました」と、気を引き締める。

えてください。みなさんの場合、昼間より夜間に走行することが多いと思います。昼間でもこうです。夜はもっと見えませんがただ見るだけでなく、しっかりと観察することが大切です。続いて発交筒の使い方を学んで昼食に入る。

午後は急制動体験からスタート。まず、濡れた路面でABS(アンチロック・ブレーキシステム)を作動させての体験。次に



セコム三重(株)の研修では、運転と反応、濡れた路面でのABS体験、セキユリティ・ドライビングについての講義などが行われた

新入社員による 交通事故を33%削減

最後にまとめ。「実際に体験して、理解していただいたと思いますが、SDの基本、クルマが来る、人が来る、何かある、相手は気づいていないと予測する。『いる、くる運転』で危険の存在を断定する、死角はここにあるのか予測する。狭い道路で車間距離をつめて走っている方は、これからは変えましょう。車間時間は3秒とってください。これから仕事として、運転することになります。その中で、『いる、くる運転、予測する運転』、今日はそれを理解するための研修でした」とインストラクターの言葉で研修は終わった。クルマの免許を取ってまだ10日、18歳の川口浩明さんは「今回は降り降りの時の安全確認をすごく注意されましたが、この研修で安全確認は普段の仕事をする上でも大事だと実感して、社会人になった気がしています」と、笑顔を見せた。

新入社員研修では、研修を受ける新入社員の運転経験は、ペーパードライバーから

毎日のように運転してきた人まで多様である。経験の浅い人が慣れない運転への不安を持つだけでなく、経験のある人でも初めて運転するトラック、MT車への不安を覚えるはずだ。(株)伊藤園の安司渉さんは「運転経験は2年半で、AT車です。MT車はしばらく乗っていないし、運転経験があるといつても乗用車とトラックは違いです。トラックは後ろが見えにくいので運転には不安があり、早く慣れたいと思っていました」と話す。さいたまコープの鈴木梨沙さんは「運転には自信がないので、研修前は不安でした。トラックの死角を理解できたことで自信も少しつきましたが、逆にプロとしてハンドルを握ることの怖さも感じ、研修前とは違う不安を感じています」と、仕事で運転することの責任からの不安を抱く。研修の役割の1つ目は、こうした新入社員ドライバーの不安にきちんと応えていくことである。

昨年からの営業担当の全新入社員に実技研修を行っている(株)伊藤園では、入社1年目の新入社員の事故が前年比で33%削減した。同社総務部の大久保部長は、「この数字は過去に例がないほど大きな削減率。学生時代にATの乗用車しか運転経験のない方が、社会人になった途端にMTのトラックに乗ると、その違いから事故を起こしやすい。トラックはまっすぐ走らせることも最初のうちは難しいため、研修で3日間乗ることでトラックの運転感覚を身につけることができるようです」と、33%削減できた要因を研修の成果と見ている。

新入社員研修の2つ目の役割は、運転に慣れた人が改めて問題点や課題を見つける再教育の場である。さいたまコープの国田充暢さんは「訓練で交差点を通行する時、自分は徐行しているつもりなのに、何度もうインストラクターの方から徐行できていないと注意を受けました。自分ではできていたと思っていても、実際はできていませんでした。配属先ではこの点を意識して危険を予測しながら運転したいと思います」と、運転の課題をあげる。同じく、さいたまコープの水本亜希さんも「教習所で身につけたはずの交通法規に従った運転が、現実にはできていなかったことを実感しました。ここで見つけたいろいろな問題をこれから

の業務の中で、クリアしていきたい」と抱負を述べる。セコム三重(株)の中村創さんは研修で一番印象に残ったのは「車間時間を3秒とること」だといふ。「頭で考えるだけでなく、体で実感できました。この研修では、免許を取って3年で運転に慣れてしまった自分を知って、基本に戻る大切さがわかったような気がします」。

そして、新入社員研修の3つ目の役割が、社会人として仕事で運転することの自覚。プロドライバーとしての自覚をもたせることである。冒頭で紹介した2年目の相沢さんと大島さんが昨年の研修で最も印象に残ったことでもあるが、今年、研修を受けた新入社員も多くも、社会人の自覚を語った。「大学時代はクルマを頻りに運転していましたが、今日のような安全運転研修は初めて。この研修を受けて自分も社会人になったのだと自覚しました。強いて言えば、人間は忘れっぽいので、気が抜けないように、自覚を持続する研修があれば受けたい」と語ったのはセコム三重(株)の青隆寛さんだ。運転経験はAT車で1年未満という(株)伊藤園の福田貴さんは、「会社から新入社員の事故が多いと聞いているので、教習所で学んだことのおさらいをしたかった。商品を積んだトラックで事故を起こしたら会社に迷惑をかけることになるので安全運転をしていかなければいけない」と考えているようだ。

「コープネット・安全運転担当の大窪さんは、企業が考える安全運転を理解してもらう場が新入社員研修ととらえている。「安心・安全な商品を組合員の方々にお届けすることが、私たちの使命です。その商品を運ぶクルマが乱暴な運転をしたり、交通事故を多発するようでは、企業としての存在価値がなくなります。業務中に事故を起こせば、個人の責任と同時に企業の責任を問われます。同じハンドルを握るといふ行為も、ドライバーと仕事では安全運転の意識合いが異なってきます。これを理解してもらおう場が、新入社員への研修です。コープネットが考える安全運転を理解してもらった上で、業務で使用するトラックの運転技術を高めていくというステップになるのです」。これは、新入社員研修を行う企業の担当者に共通の思いである。